

From ACP (米国内科学会) Japan Chapter



米国内科学会 (American College of Physicians: ACP) 日本支部では、2003年の設立以来、日本にある既成の専門医学会とは一線を画する活動を行っている。本コーナーでは今後、本年開催のACPH本支部の年次総会で開催された講演から選りすぐりのもののダイジェスト版を連載する予定だ。その第1回として、ACPH本支部と本年総会について紹介しよう。

ACPとACP日本支部の概要

ACPは、1915年設立の米国内科専門医学会 (ACP) と、1956年設立の米国内科学会 (ASIM) が合併して1998年に誕生した。現在、世界80カ国に130,000人 (医学生・研修医会員15,000人を含む) の会員を有する国際的な内科学会である。

ACP日本支部は、2003年にアメリカ大陸以外では初めて設立が許された支部で、現在、会員数は1,000名を超え、医学生や研修医など若手会員が20%を占める。日本内科学会の総合内科専門医を有する内科医はACP正会員に、ACP正会員のうち要件を満たす者はFellow (FACP) の称号を申請できる。

支部の設立です。日本内科学会理事長に推挙されたのを機に、私はACPと交渉を開始。並行して国内でのACP理解者を増やす努力も始めました。

そのころ東西冷戦が終結、wwwが開発され、世界はインターネットなどによりグローバル時代に突入していきます。情報化社会では、世界標準と比較した日本の医師の臨床教育の不十分さ、専門医制度の基準の甘さなどが徐々に表面化していきました。BST、BSL、クリクラなど、名前は変われど中身は変わらない。こうした背景もあり、私はACP日本支部開設に向けていっそうの働きかけを行いました。

そして2002年、多くの方々の尽力の甲斐あって、日本内科学会が京都で開催した「第26回国際内科学会議」期間中に、ACPのSara Walker会長から、日本支部の開設を正式に認めていただいたのです。米国大陸以外ACP支部の設置が認められたのは初めてのこと、快挙と言っていいでしょう。

ACP日本支部では水準の高い生涯教育のノウハウの共有をする機会を設け、内科医としての質向上を図れる場所を提供しています。私はACPの伝統である、自身の質を維持し社会に対して責任を負う、というプロの内科医たる者の精神と資格を、次世代の医師たちのために「世界の中の日本」を根づかせていければと思っています。



ACP日本支部初代支部長
政策研究大学院大学アカデミックフェロー

黒川 清氏

■ ACP日本支部設立の 趣旨と経緯

なぜ、日本にACPの支部をつくったのか。理由はいろいろありますが、端的に言えば、「外から見た日本」を感じると私の皮膚感覚がそうさせたというのが正直なところです。

多くの医師の留学のように2、3年

のつもりで1968年に渡米した私は帰国せずにそのまま滞在し、米国カリフォルニア州の医師免許を取得、つづいて内科専門医、腎臓内科専門医の資格を獲得してUCLAの内科教授も務めました。

そして約15年後、1983年の暮れに帰国。知ってはいましたが、日本の医学界が強く研究重視に傾き、臨床教育は明らかに軽視される傾向が、ほとんど変わっていないことを確認しました。時代は大きく変わっていたにもかかわらずです。

当時、欧米のいくつかの大学では、大きな時代の変化をとらえて医学教育の改革が始まっていました。高齢社会へ向かう対策としての医療制度改革、医学分野の研究にも分子生物学手法の導入が始まり、大学におけるGeneral

Internal Medicineの役割、さらには、School of Public Healthなどが医師の間でも注目され始めたころです。米国は、内科専門医を取得した医師が集う場となり、米国の専門分野の学会が世界で圧倒的に強い吸引力を持ち出しました。一方、1990年ごろの日本では、生涯教育の名のもと多くの学会の認定医・専門医制度などが乱立し始め、歴史的な背景もありますが、大学教授が中心の学会による認定医や専門医が輩出される仕組みができてきた状況でした。

「このままではいけない」。私は、日本の医療界、医学界の在り様に強い危機感を抱き、若い人たちのためにも、なんとかしなければならぬと思いました。

そこで思い立ったのがACPの日本